

ダイダラボウシ

はるか遠い昔のこと、出羽の

羽黒山にそれはそれはとてつもない

大男が住んでおりました。身の丈は

雲を突き破り

天空に届く程で、ひげ

もじやらな顔に

目は爛々とし、見る

からにこわそうでしたが、

気はやさしく力持ちでした。

大男の名はダイダラボウシ、

でん坊、だいたい坊などと地方によつてそれぞれ呼び方が違つていました。

この

超人的巨人は時によつては山を背負つたり、引きずつたりしたのでした。

ある日のこと

ダイダラボウシは、出羽の山の一部を藤つるで編んだモッコにのせて南

の方へ向かつて

歩きだしました。モッコにのつた山の本々はダイダラボウシが歩くたび

にまるで嵐でも

きたかのように、ざわざわと音をたて大ゆれにゆれていました。

途中

幾重にも重なる山々をまたぎながら歩くダイダラボウシの足音の響きは

大変なもの

でした。付近の村人の家はあたたか

かも大地震の

ようにガタガタと音をたててゆれたということ

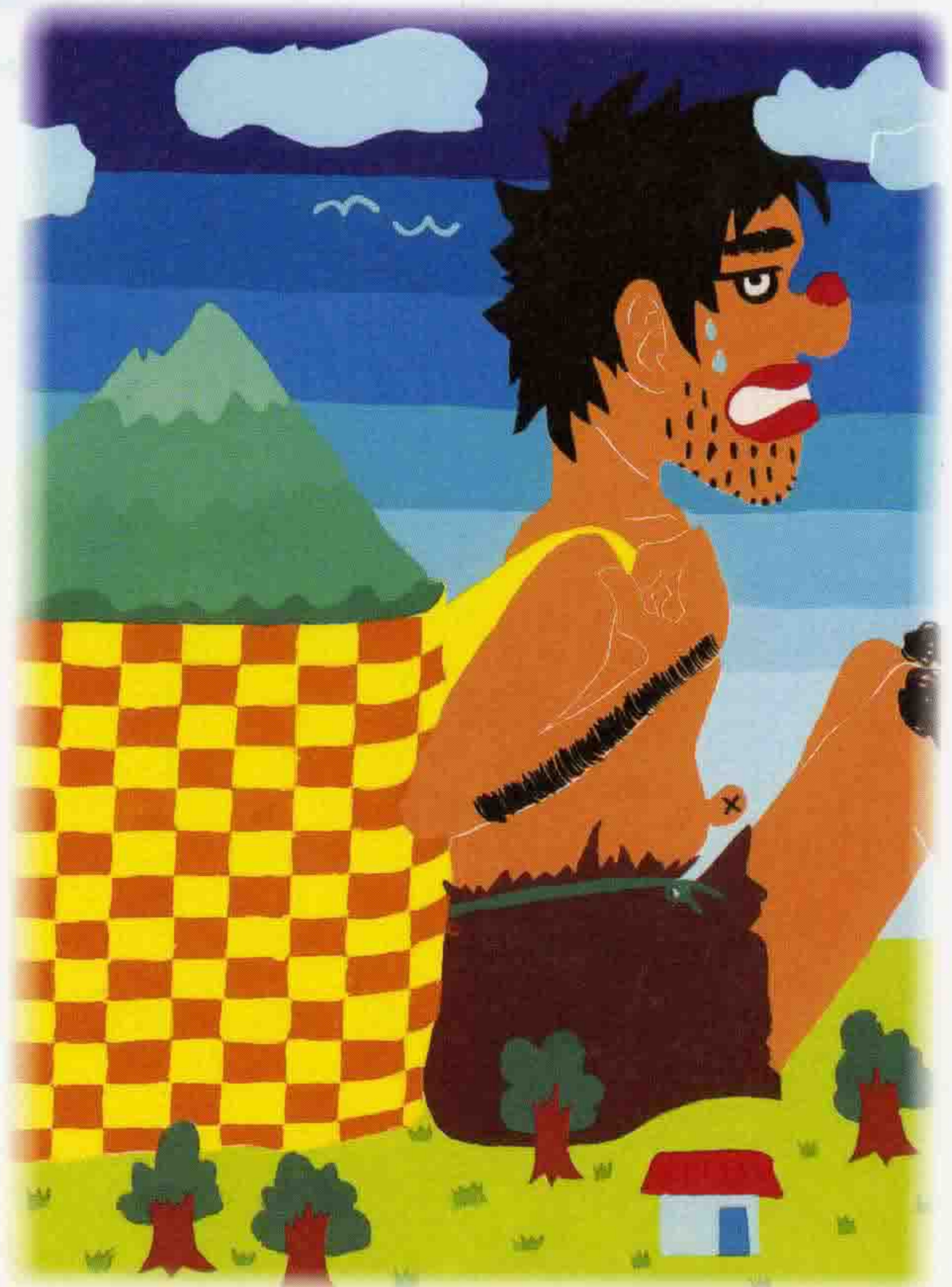
た。

付近の村人の家はあたたか

かも大地震の

ようにガタガタと音をたててゆれたということ

た。



です。ダイダラボウシは太平洋や富士の山をながめながらあてもなく歩き続けました。
下野の国氏家の辺りに来た時のことです。さすがのダイダラボウシも、

「ああ、つかれたなあ。この辺りで一休みでもすんべか。」
腰をおろそうと自分の足元を見ましたが、胸元辺りに雲がかかり自分の足元を見ることができませんでした。

「この辺りは、どこだんべえかな？」
胸元の雲をかきわけながらふと自分の足元を見ると、きらきらと輝く一筋の流れが目に入りしました。

喉がかわいたダイダラボウシは川岸に腰をかけて、

「やあ、うまそうな水だ。」

両手で水をすくいゴクゴクと音をたてながら飲みました。すると川の水は、たちまち少なくなり、川の流れがいく筋にもなってしまったのです。これが東鬼怒川と西鬼怒川ができた始まりだともいわれています。その時、川の下流では一滴の水もなくなっていました。村人は突然の水不足に、

「おおい、川の水がなくなったぞや。なんだんべや？」

と、それはそれはおどろいたそうです。また、ダイダラボウシが鬼怒川で水を飲もうとして尻餅をついた時、川の流れがせき止められ水が上流に押し上げられその先端あたり

が現在の塩谷郡の押上地区であつたとか……

水を飲んで一休みしたダイダラボウシは、

「さてさて、でかけるとすっぺか。」

と、モツコを再び背負い立ち上がりました。

この大男は大変気まぐれで、今まで南の方を向いて歩いていましたが、急に向きを変え西の方を向いて歩き始めました。ところが、歩き始めて間もなくのことです。現在の芦沼の辺りにさしかかったころ、重い山を背負つたダイダラボウシの足は、ズブズブと膝の上まで埋まるようになってしまいました。

「なんだこりやあ、ひどいなあ。」

ブツブツ独り言をいいながらさらに西へと歩き続けました。やっとの思いでぬかるみを通り過ぎたダイダラボウシは、泥だらけになつた足を見て、

「ううっ、気持ち悪いや。」

と、ふと足元を眺めると、またまた一筋の流れが目にとまりました。

「足でも洗い、さっぱりとすっぺか。」

その場に山を背負つたまま腰をおろしました。

「やれやれ、たいへんな所にきてしまつたもんじゃない。」

と、川の水を両手ですくいあげ、自分の足の泥を流し落としました。この時も川の下流

の水は一滴もなくなってしまうたそうです。

すっかり足もきれいになったところでダイダラボウシは、

「きてきて、でかけっぺか。」

腰をあげ山を持ち上げようとしたが、山は動きませんでした。そこで大声をあげ力を入れたところ、モッコを背負っていた藤のつるが突然ブツンと切れてしまい、山は轟音とともにその場に崩れ落ちてしまったのです。そのはずみでダイダラボウシはよろよろとよろけ肘をついてしまいました。この時肘をついた所が、現在の塩谷郡肘内と呼ばれている地区であるといわれています。ダイダラボウシはしばらくの間考えこんでしまいました。やがて何を思ったか、すつくと立ち上がり山をその場においたまま何処へともなく行ってしまったということ。そこに残された山が、後にお羽黒山と呼ば



鬼怒川と羽黒山

ばれるようになったのです。

この大男おおおとこダイダラボウシの足を汚よごした辺りあたには、葦あしにおおわれた沼ぬまが点在てんざいしており、この大男の足跡あしあとだといわれています。この場所が現在の芦沼あしぬまだったのですが、土地改良とちかいるりょうなどにより今はこの沼はなくなってしまいました。

また、現在の今里愛宕橋げんざい いまざとあたごばしの西付近にしふきんに近年きんねんまで池いけがありました。これも大男ダイダラボウシが、羽黒山はぐろさんに腰を掛けて休んだ時の左足の跡あとだといわれています。

もう一方の足跡は羽黒山の南登山道の西側辺りにしがわあたにある湿地帯しつちたいだと伝えられています。羽黒山頂はぐろさんちように十国平じっこくだいらと呼ばれ木きのない平たいらな所ところがありますが、ここはダイダラボウシの腰掛こしかけた跡あとだといわれています。

羽黒山の初夏しよかを飾かざる薄紫うすむらさきの藤ふじの花はなも、ダイダラボウシが山やまを背負せおって来た時の藤ふじのつるが根付ねづき増ふえ広ひろがったものだともいい伝えられています。



このような昔話むかしはなしは関東各地かんとうかくちは言うまでもなく全国ぜんこくに伝えられている巨人伝きよじんでん説話せつわなのです。はるか時代じだいを越えた山河さんかを創造そうぞうした雄大ゆうだいなロマンです。ここで取り上げた話はなしも昔むかしから伝つたわる話はなしにすぎません。お羽黒山はぐろさんは、自然しぜんの中にどっかりとかまえてあります。晩秋ばんしゅうのころには柚子ゆずも色付いろづき、ぼんてん祭りまつで町内ちやうないがにぎわうのです。